

紹介

池内義資編

『中世法制史料集』

別巻 御成敗式目
註釈書集要

池内義資氏が佐藤進一氏とともに、『中世法制史料集』の第一巻として、『鎌倉幕府法』を刊行されたのは昭和三十年であった。新編追加などを頼りに、心もとない足どりで中世法制史の研究をはじめたばかりの私は、やや興奮気味の書評を本誌の三九巻三号に記している。法制史の研究が不振な時期だった。ごく一部とはいえ、このような史料集の刊行に、冷評さえ聞こえる時期であった。そのような中で、この史料集が刊行されたことは、私には大きな励みとなった。爾来私は同書を座右の書として、常に学恩を蒙っていることはいうまでもないが、その学恩も私にとっては、単に知見を与えられるだけの、世の常の学恩とは違った、格別のものなのである。

その後『中世法制史料集』は、第二巻の『室町幕府法』、さらに百瀬今朝雄氏も加

わって第三巻の『武家家法』の続刊を見た。編集方針は各巻によって必ずしも一様ではないが、正統の群書類従、史籍集覧、日本古代法典等に散在していた法制史料が、もっともすぐれた底本に基づき、厳密な校訂を経、数々の未刊史料をも加えて、編年順等の一定の秩序に従って配列され、さらに広い視野に立つて参考資料までも収録されていることは、この史料集のすぐれた特色であり、学界が蒙った恩恵は、はかり知れないものがある。

さてその池内氏が、このたび『中世法制史料集』の別巻として、『御成敗式目註釈書集要』を刊行された。氏が調査した三十余種の御成敗式目註釈書の中から、もっとも重要な八種を選んで収録したものである。すなわち(一)御成敗式目唯浄裏書(龍門文庫所蔵)、(二)関東御式目(陽明文庫所蔵)、(三)御成敗式目榮意注(慶応義塾図書館所蔵)、(四)蘆雪本御成敗式目抄(東京大学文学部国語学研究室所蔵)、(五)御成敗式目注 池辺本(東京大学附属図書館所蔵)、(六)御成敗式目抄 岩崎本(東洋文庫所蔵)、(七)清原業忠貞永式目聞書(龍門文庫所蔵)、(八)清原宣賢式目抄(東京大学附属図書館所蔵)の八

種である。鎌倉後期、正応二年(一二八九)の奥書のある(一)をはじめとして、いずれも天文年間以前の書写にかかり、且つ(四)のほかは、紀年、筆者が明らかであって、式目註釈学の進展と、註釈に対する諸家の識見とを知る上に、重要だという理由で、これら諸本が選ばれたのである。

校訂にあたっては、異本のあるもの(二)、(四)、(六)は、校合によって同系本の原形を求めることに努め、異本のないもの(一)、(三)、(五)、(七)は、忠実に復刻することを主眼とするともに、諸本固有の特徴に応じて、それぞれにふさわしい校訂法がとられている。複雑、多様を極める訓点を活字で印刷するという至難な事業にも、敢えて挑戦がなされている。

武家法の中でも、御成敗式目は特別の尊重を受け、広く読まれ、初学者の学習用にも供され、多くの註釈書も著された。すでに鎌倉時代に唯浄裏書、関東御式目、是円抄等の註釈書のあること、室町時代には武家側の斎藤、飯尾、公家側の清原の、三流の註釈が行なわれたこと、清原宣賢の式目抄が、中世における御成敗式目研究の最高峰であること等について、我々は一応の、

概説的な知識を持つてはいるが、それらの註釈書に実際に接するのは容易ではなかった。既刊の式目註釈書としては、「式目抄」(清原枝賢奥書)、「統史籍集覧 二」、「御成敗式目注」(統々群書類従七)、「式目聞書」(統群書類従 二五上)があるのみであり、しかもそれらは、書写年代や伝本の系統論からいって、必ずしも最善本とはいえなかった。このたび八種の註釈書が、厳密な校訂に基づき刊行された意義は大きいのである。

しかしすでに他の評者も述べていることだが、式目註釈書を通じて知られるのは、あくまでも「式目註釈書の世界」であって、「御成敗式目の世界」とは異なる。本書の序で牧健二氏が適切に評価しているように、これらの註釈書は、その多くが作られた室町から江戸初期にいたる政治思想史、法思想史の重要資料であって、司法・行政の実務とは別箇のものなのである。

この紹介の多くを、私は八十余頁に及ぶ池内氏の詳細な解題を素材として執筆した。私の知識の乏しさ故だが、学界全般を通じて、式目註釈書についての知識も関心も豊かとはいえない。本書の完成には佐藤氏、百瀬

氏らの協力、援助があったとはいえ、式目註釈書は池内氏の独擅場であり、『中世法制史料集』の中でも、この別巻に限っては、池内氏を措いて編者は得られなかったであろう。

昭和五十三年本書を刊行され、余人をもつて代えがたい大事業を達成された池内氏は、その安堵からであろうか、昨五十四年十月二十八日、八十二歳をもつて長逝された。本書の奥書は一九七八年一〇月二七日となっており、奇しくも本書刊行の満一年後に逝去されたのである。眠るがとき大往生であったと承わる。池内氏には『中世法制史料集』のほかに、式目伝写本の系譜を探究した『御成敗式目の研究』の労作がある。孜孜として式目研究に生涯を捧げられた篤学の先学を失い、哀悼の念切なるものがある。

昨年十二月、池内氏が蒐集された中世武家法関係資料約九十点が、御遺族によって京都大学文学部国史研究室に寄贈された。内容は御成敗式目、同註釈書、追加集等の写本、版本で、享保の奥書のある相頼寺本、御成敗式目を除いて、多くは写真であるが、式目註釈書の蒐集はとくに網羅的であり、

後学の研究に資するところが大きい。池内氏自身の筆写による数点も含まれているが、あの浩瀚な宣賢式目抄を丹念に書写されているのを眼にして、頭の下がる思いを禁じ得なかった。御遺族の御好意に深謝し、心から池内氏の御冥福をお祈りしたい。

(A5判 六五七頁 一九七八年一〇月
岩波書店 九〇〇〇円)
(上横手雅敬 京都大学教授)

小和田哲男著

『戦国大名』

最近の戦国期研究の深化と拡がりは実に目覚ましいものがあるが、本書はハンディな啓蒙書に新しい研究成果を盛り込んだ意欲作であり、全体の構成は次のようになっている。

概観 動乱の戦国時代

1 守護大名から戦国大名へ

守護大名と戦国大名のちがい 戦

国時代の範囲

2 出自の虚像と実像

系譜からみた戦国大名 国人領主
の戦国大名化 北条早雲と斎藤道

三